

山路之徽『和蘭緒言』の考察

——蘭語学史上の新資料——

杉 本 つ と む

はじめに

早稲田大学図書館所蔵の『和蘭緒言』をやつと拝見することができた。かねて予想していたとおり、すばらしい資料である。資料の記述内容がそうであるのみでなく、資料に登場する人物も時代もすばらしいのである。多年、資料探訪にたずさわってきて、こうした第一級の資料に出逢うことは、ごくまれであり、開巻の興奮はまことに学者名利に尽きるものである。親しく考察する機会を与えていただいた図書館当局に心から謝意を表したい。まず本書の体裁について紹介しておこう。

- ①写本一巻、卷子本仕立て、故勝俣銓吉郎先生旧蔵。(函架番号 文庫8・C665)(写真I参照)
- ②外題は墨書きで、△和蘭緒言▽、内題も同じ。上質の鳥の子紙使用。りっぱなものである。



写真 I

- ③巻末の識語は、△右和蘭緒言一卷姫路少将源忠恭朝臣之書也 伏乞密写之 等随俊衍印▽とある。

写真でわかるようにしながら一巻の免許皆伝の秘伝書のごとく

和蘭緒言

先府君

德廟命蒙年

朝貢和蘭人交

冠時

府君從相與和蘭人一文曆數事聞端初

番字及彼國ノ音韻ヲ知ラシム
依テ通辨先ト白石

先生米芾異言云地理書著蘭學緒發イハ推

惟感字以地名譯スルノミ惜シ字音學反ニルナリ野呂青木

西氏此學竟^リ上^ル詳^シ窮^ム傳^ル言^フ耳^ヲ圖^ノ字^ヲ以^テ畫^ス

言スルノミ
之儀
鴉舌鳥語
ガナルヲ憂
家字ノ

暇彼國ノ字音
字北々二十許年
然々然々然々
畧々其

緒ノ探索ニ
遂ニ此等ノ及
リ口ノ音

國於和蘭、文藝ヲ預聞スル鮮美吾

邦久運之盛十九今也

都下番字知モノ多シ然レモ皆野呂

青木西一氏及吾儕等ノ瀛汎ナルモノニ于茲友人樂山前野氏

山路平之微編撰

である。そして箱入りであるが、その箱書きには、本書が群馬県の某氏が所蔵しており、高野長英とも深い関連があったように記されていて、ますますその伝来の確かさと、関連人物に興味をそそられる。

既に十五年ほど前、わたしは、本書と類似した『蘭学緒言』(写本一冊本)を天理図書館で拝見しているが、本書とまさしく同じ山路之徴の撰述で、内容的にもほぼ一致する。⁽¹⁾ただ同書は冊子であり、若干異なる記述もあるが、それはそれとして注意すべきものである。これについては雑誌に報告済みなので、今回は特に比較して吟味することはない。

う志があつた故らしい。即ち、天理図書館所蔵の『蘭学緒言』の序では、シナで訳しているヨーロッパの地理書を批判し、且つオランダ語の習得の困難をのりきる自信を示して、次のように述べている。

(前略) 漢字ノミヲ用ユルノ地圖ハ日本朝鮮等ノミニテ其用甚小ナリ天下萬國公用ノ地理書ニ非ス今予之ヲ還源シテ和蘭本國ニテ制スル所ノ地理書ヲ校閲シ悉ク地名物産等ヲ正シ之ニ附スルニ漢字國字ヲ以テシ寔ニ天下萬國公用ノ地理圖説ヲ述ント欲ス之ヲ編スルノ本ハ全ク和蘭ノ文字言語ヲ習熟スルニ在リ之ヲ習フノ道ナキニ非ス

『寛政諸家重修譜』によると、安永七年(一七九六)に、五十歳で死没していることがわかる。これはまた『天文方代々記』の八評定所儒者山路久次郎^(ママ)なることも判明した。すなわち同書によると次のように記述されている。

寶曆十庚辰年五月九日部屋住^(ママ)曆作測量御用向是迄父彌左衛門相勒候通手傳可相勒依之御扶持方五人扶持被下置旨堀田相模守殿被仰渡旨松平頼母申渡明和三丙戌年七月十八日初而

御目見被仰付安永二癸巳年三月七日父彌左衛門跡式無相違被下置旨於菊之間御老中御列座松平右近將監殿被仰渡小普請組堀田三六郎支配^(ママ)ニ罷成同三甲午年十一月十二月久留嶋數馬支配ニ罷成同六丁酉年五月三日評定

所勒役儒者被仰付並之通御役料五拾俵被下置候旨於御右筆部屋縁類田沼主殿頭殿被仰渡同七戌戌年正月晦日病死仕候

本書のはじめに八山路平^Vとあるのは、山路家が平氏の出自であるからであらう。序で八和蘭人ト天文曆数ノ事ヲ闡論ス^Vとあるように、父親はかの有名な山路主住(通称は久次郎で親子とも同じである)で、その和算家としての実力と令名はここで贅言を要しまい。したがって之の徴も和算や天文・曆などの研究に専念したわけである。この方面ではやはりかなり知られた人物として活躍している。上で引用した中に、安永二年(一七九三)に八父彌左衛門跡式無相違被下

置旨Vとあるように、この年に父の跡をついだことがわかる。論末に作成した八江戸初期蘭学者の生存期間比較一覧表Vで了解できるように、江戸の蘭学の初期に属し、青木昆陽、野呂元丈、前野蘭化、杉田玄白などとほぼ同じころの人物といふことができる。これは本書に登場する人物名からも判定できるのである。

山路之徽については、これまで蘭学や蘭語学との関連で考察記述されたものはないようである。『天文方代々記』にもこの点の記述はない。せいぜい父、山路主住の子として数学に励んだという点のみである。この点、本書は新しい山路之徽像といったものを示して余りあるといえるであろう。篤実謹厳、きわめて謙譲な人であったという父、主住の学風と性格を受けて、之徽もまたあまり目立つことがなかったかと思う。しかし父が久留米藩主、有馬頼徳ヨリノリの数学の師であり、改暦や天文方の有名なメンバーとして、幕府の事業にたずさわっていたから、早くから藩主や幕府要路の人びととの接触もあり、また之徽自身も評定所勤役儒者として、仕事や生活面では、俗にいう日のあたる場所におり、活躍できる場を得ていたと推定できる。

さてこうした之徽が、実は以下紹介するように、青木昆陽や野呂元丈とともに、江戸における蘭語学の基礎を確立するに努力した蘭学者の一人でもあった。弱冠のころから、参府の蘭人と問答をかわし、オランダ文字やその発音を習って、世界地理書なども翻訳した有力な蘭学者だったのである。こうした新しい之徽の学問の一端が、本書、『和蘭緒言』によって語られているのである。まず序文にあたるところを抜き出してみよう(写真Ⅱ参照)。表記は統一した。

和蘭緒言

先府君

徳廟ノ命ヲ蒙リ年々朝貢ノ和蘭人ニ交ル小子之微弱冠ノ時ヨリ府君ニ從テ相與ニ和蘭人ト一々天文曆數ノ事ヲ闡論ス初メ番字(マヤ)及ヒ彼國ノ音韻ヲ知ラズ象胥ニ依テ通辨ス先キニ白石先生采覽異言ト云フ地理ノ書ヲ著シ

蘭學ノ緒ヲ發トイヘ^レ惟々^カ惟々^ナ國字ヲ以テ地名ヲ譯スルノミ惜ラクハ字音ノ學ニ及ハサルヲ野呂青木兩氏此學ニ意アリトイヘ^レ譯家傳フル言ヲ耳ニシテ國字ヲ以テ書記スルノミ之微獨リ其ノ鳩舌鳥語ノ如クナルヲ憂ヘ家學ノ暇ニ彼國ノ字音ヲ學ヒ括々二十許年順々然トシテ略々其緒ヲ探索シ遂ニ此舉ニ及ヘリ曰ク吾國ニ於テ和蘭ノ文藝ヲ預リ聞クモノ鮮シ矣吾

邦文運之盛ナル今也都下ニ番字ヲ知ルモノ多シ然レ^レ皆野呂青木兩氏及吾儕等ノ灑派ナルモノ也于茲友人樂山前野氏此學ニ敏ニシテ夙夜工夫遂ニ以テ彼國ノ字音ノ學ヲ得テ既ニ彼國ノ書ヲ手自ニ折中スルニ至レリ之ニ賴テ闕疑質正シテ和蘭小學ノ道及ヒ音韻ノヲ序テ且ツ專ラ天文曆數ニ切ナルヲ述シ及ヒ萬類ノ名ヲ書[□]是[□]學フノ階梯ヲ著シ以テ不朽ニ致ス實ニ樂山子之功哉

右の記述でまず目につくことは、友人樂山前野氏Vのことであらう。樂山はいうまでもなく前野良沢（蘭化）の号である。しかも樂山について、之微は^ハ遂ニ以テ彼國ノ字音ノ學ヲ得テ……Vとあるから、樂山が蘭語の初歩をいちおうマスターしていることを語っている。⁽³⁾とすると、樂山自から語るように、^ハ熹四十八ヨリコレヲ學デ今歲犬馬ノ齡六十九……V（樂山が最上徳内に与えた書翰。『前野蘭化』所収）という記録からいくと、本書は、樂山の四十八歳即ち明和七年（七七〇）以降ということになる。ちょうど毘陽死没の翌年である。そしてこの年に、樂山は長崎遊學をしたことになっている。しかしさすれば本書の成立は明和七年以後の、しかも、樂山がかなり蘭語に精通した時ということになる。現代知られている一番古い樂山のものは『蘭訳筌』で、^ハ明和辛卯仲夏V成立と見えるものである。明和八年ということになる。こうして記述をおっていくと、明和七年から蘭語を習った人間が、明和八年に蘭文法書——よしごく簡単な入門書ではあっても——を著述したことになる。しかしこれは、従来の説をふまえた故に出てきた矛盾である。ことに樂山ほどの人物がそうした軽卒な言動をするはずがなからう。したがって、これまで言われて

いるような楽山の蘭語学習時期こそ再検討されるべきで、おそらく、もっと早い時期に学習がはじまったのであり、昆陽についた時期もこれまで考えられているより早いのに疑いがないと思う。之徴すら二十年余も蘭人について学んでいるのである。おそらく明和七年云々には蘭化自身の一種の虚構があり、宝暦年間その半ごろには学習に着手しているのではなからうか。この明和八年ころからあるいは楽山が自信もって蘭語を習いおぼえたと言言できたということでもあらう。⁽⁴⁾しかしそれはさておいて、すくなくとも本書は、楽山がよく蘭語に通じていたと記述はされているわけであり、しかも実は後述のように、本書は明和七年以前に作成されたものであることもほとんど確実な証拠がある。それは本書の識語の△姫路藩主、源忠恭△のことから出てくるのである。この藩主については後述するが、源忠恭と酒井忠恭は安永元年（七七二）、六十三歳で死没しているのである。したがって、書写したのは、それ以前であり、さらに本書の成立——之徴の執筆時期まで考慮する——まで考えると、安永元年より二年前の明和七年成立とはどうしても考えにくい。忠恭が何歳の時に書写したかは残念ながら明記されていない。しかし、姫路藩主となった寛延二年（七五九）より死没の間にあることはまず確実であらう。

次に、何のために書写したかを考えれば、やはりこうした方面に、忠恭が関心をもっていたからであらう。そして之徴の初めて御目見得を得た年、明和三年（七六六）あたりを考えると、おそらく忠恭自身も、まさかこうした性質の書物を死際に書写などしないであらうから、明和三年ごろ、即ち忠恭が五十七、八歳、あるいはそれ以前の書写と考える方が妥当するかと思う。とすると、楽山の蘭語学習も必然的にさらに早い時——『蘭訳箋』で、自身が述べているように、△弱齡ノ時△である——であらうと思う。こう考えてくると、本書はまた昆陽なども活躍していたころに山路之徴が記述した著述ということになる。さらに本書の執筆契機などを考えると、野呂元丈なども在世していたころかも知れない。次にこの点について考えてみよう。

成立と目的

本書の成立を推測するものとしては、まず、ハ弱冠ノ時ヨリ府君ニ從テ相与ニ和蘭人ト天文曆数ノ事ヲ闡論ス^①とあったり、ハ彼国ノ字音ヲ学ヒ栖々二十許年順々然トシテ略々其緒ヲ探索シ遂ニ此挙ニ及ヘリ^②とある点が考慮できる。まず、後者の記事のハ二十許年^③を仮に明和七年から二十年さかのぼった時とする、一七五〇年ごろ、即ち、宝暦元年（一七五）のころになり、之徽が二十三歳のころとなる。これは前者のハ弱冠ノ時^④という表現とほぼ一致すると考えてよからう。別の比較一覽表でわかるように、元丈も約六十歳で生存しており、蘭語学習をしていたわけである。他の人たちとの関連を考えて妥当するかと思う。序で、ハ都下ニ番字ヲ知ルモノ多シ、然レモ皆野呂青木兩氏及吾儕瀛派ナルモノ也^⑤と述べている点とも一致しよう。新井白石のあと、昆陽や元丈が参府の蘭人に蘭語を習い、さらに之徽や蘭化がこれにつぐといった順がよく史的にも了解いくであろう。楽山は之徽より六歳年上であり、之徽と違って、片手間でなしに蘭語を勉強し、加えて長崎遊学もしているから、一段と蘭語学習に進歩があつて、之徽が楽山に質正して、本書を書きあげたというのも自然である。之徽が楽山を友人と呼んだり、昆陽、元丈にも氏と呼んでいる点、ともに蘭人について蘭語を学習した仲間という意識があつたのではないかと思う。さらにハ都下ニ番字ヲ知ルモノ多シ^⑥も注目しておきたい。江戸での蘭語学習はも早はじまっているのである。

以上のような推論から、本書は山路之徽が二十三歳ぐらいから、参府の蘭人について蘭語を学習し、また自学自習して、約二十年後、明和七年以前に楽山、前野良沢に質正して書きあげたものということになる。年齢的には約四十二、三歳のころのものであろう。そして成立したそのころすぐに、姫路藩主の酒井忠恭がこれを書写したということである。時に忠恭はおよそ五十七、八歳と考えられる。ただし、之徽がハ二十許年^⑦というのを、厳密に二十年とし

て考えねばならぬこともないから、むしろ忠恭の年齢を考慮すると、さらに五、六年はさかのぼって、明和初年から五年ぐらいの間を想定することも、あるいは可能かと思う。蘭化が第二の長崎遊学をした明和七年より、二、三年前とすることも妥当であろう。⁽⁶⁾

こうして本書は、蘭化の『蘭訳筌』よりさらに数年さかのぼったころの成立であり、その体裁からいけば、まさしく江戸での最初のオランダ語入門書といってもよい。しかも例の『蘭学事始』などにはついぞ書かれていない重要な史実を本書が語っていることにもなるのである。さらに、前野蘭化が、はじめて参府中の蘭人に接したのが、明和三年（二七六）という従来の説も疑わしいことになる。⁽⁷⁾ すくなくとも、之徴が宝暦初年から参府の蘭人に接しており、その友人である蘭化が、それより十五年ほど後にやっと蘭人に接したとは考え難い。また昆陽に師事したことも確かであるから、昆陽の紹介でも蘭人に接する機会には蘭化にあったであらう。本書の執筆のころ蘭化の蘭語学が之徴のいうようなものであったのであらうから、これを独学とは考え難いので、既に明和三年以前に蘭人に接していたであらうし、第一回の長崎遊学もとげていたと推定したい。これはかなり重要な問題なので別論を参照されたい。

こうしてついに之徴は『万国地理図説』を翻訳脱稿するのである。之徴のこの地理書はこれまで紹介されていないし、『鎖国時代の世界地理学』（鮎沢信太郎）にも見えない。蘭化や山村才助の翻訳に先立つもので、おそらく日本で最初の本格的な翻訳地理書といってよからう。これについても十分に考察する必要がある。之徴の地理学者ということもこれまで知られていない重要な面である。これについても考察が終ったので次の機会に発表したいと思う。

これまで、医学書や天文学書、さらに本草書を読むための蘭語学がまず考えられたわけであるが、之徴の出現によって、地理書を読み解くための蘭語学習も考えられるわけである。蘭語学史上、その独自の意義を評価したい。そし

て、漢字表記ではついに狭い地域の日本、朝鮮ぐらいに通用するだけで、△天下万国公用▽の役にたたぬという認識も之徴がなかなか洞察に富み、よく世界や国家のあるべきあり方を認識し、予見していた学者と称することができると思う。しかも当時の学問書一般の文体から考えて、漢文体をとつても不思議ではないのに、△漢字国字▽（漢字かなまじり文）をもつて訳述するという前向きの方法をとっているのである。このへんまで考えてくると、之徴は単なる評定所儒者にとどまらず、文化人として、知識人として、日本と日本人のために先達となろうとした進歩的学究の徒といわねばならない。鎖国時代の閉じられた日本の中で、その志向は開国や世界へとまっすぐに進んでいる。視野の広い有力な学者というべきである。こうした真に日本のあるべき、進むべき方向を認識した学者が、宝暦明和の間に出現したことは、近代日本の形式において、大いにプラスになったはずである。これが『蘭学事始』に欠落しているのは、とりもなおさず従来の対蘭学認識と研究において、重要な歴史の一部分の空白であり、わたくしたちの責任を反省、自戒せねばなるまい。

3

酒井忠恭と蘭学

さて右のような『和蘭緒言』が、姫路藩主、酒井忠恭によって書写されたという点も、きわめて興味のあることである。忠恭についてはほぼつぎのようなことが知られている。

関が原の役の後、上野国前橋三万石に加増された酒井雅楽助正親を祖にもつ。寛延二年（二五九）、姫路藩に転封になった（初代に相当する）延享元年（二四四）より寛延二年（二五九）まで幕府老中という要職についている。忠恭の嫡孫に忠以・忠因があり、後者は△酒井抱一▽（二七六）である（後述参照）。

右のうち、延享二年（二五九）寛延二年まで、老中の要職にあったことは一考に価しようか。老中というのは、現代の各省

大臣以上の役柄で、総理大臣にも匹敵するそうである。そうした人物が、自からオランダ語の入門書を手写——しかも上で考えたように、かなり晩年に——しているというのは、これまた注目すべき点であろう。もちろん、八姫路藩主Vとあるから、忠恭が移封を命ぜられた寛延二年以降のものであり、老中職は去っている。しかし三十五歳の若さで、老中に任ぜられるほどの人物であることも、彼が普通の人物でないことをもの語ってしよう。しかし不思議なことは、河出書房の『日本歴史大辞典』には、この忠恭だけ見あたらないし、一般に忠恭は省略されている。その他、福井久蔵『諸大名の学術と文芸の研究』（昭和十二年）にもただ、八姫路侯酒井忠恭鷺山と号す。文名ありしが與正木利充序などの外所見なしV（五九ページ）と簡単にあつかっているにすぎない。最近の『姫路藩の人物群像』（穂積勝次郎）にも、ほとんど注目すべき記事をのせていない。残念なことである。

忠恭が正確に何歳の時に本書を書写したか断定できないけれども、上で考えてみたように、五十五歳より六十歳の間と考えるのに、ほぼまちがいはなからう。とすると、現代流にいうと、定年退職後にこの方面に情熱を燃やしていたことがわかる。このことは忠恭が、何時ごろからオランダ語に興味をもち、学習するような志をたてたかを考えることとつながる。彼が老中になった延享元年に天文台を神田佐久間町に建てたり、同三年には長崎貿易をオランダ船二隻、中国船十隻に制限するなどのことをおこなっている。また彼が寛延二年、姫路に移封される前年に、姫路藩は全藩にわたって、減免を要求する農民一揆がおこっているというから、あるいは忠恭の政治力がかわれて、移封されたかも知れない。——わたくしは忠恭を決して過大評価するつもりはない。あくまで事実には忠実に記述することを心がけているが、忠恭に関して、従来の記述はあまりに貧弱である。本書を通読して、これを書写した底になみなみならぬ忠恭の向学心を見るのである。もし彼個人の向学心ということからではないとしても、幕府の最高責任者だった人物が、かかる外国語の学習入門書を書写しているところに、幕府の政治姿勢や、要職にいたれば日本のブレイン

の開明性までも垣間見ることができると思うのである。これをもし単に幕藩体制の補強策に出ていると評すべきであろうか。上であげたが酒井忠恭の三男、忠仰タダモトの子に化政期の著名な画家、芸術家である酒井抱一がいる。彼が宋紫石についたといわれ、蘭画修業をしたといわれている。こうした抱一の芸術志向にも、あるいは祖父にあたる忠恭などの影響が直接、間接にあったと推測するのは必ずしも妄想とはいえない。

こうして本書が酒井忠恭に書写されたという歴史の重みは、十二分に評価吟味すべきかと思う。日本の近代化と幕府重臣の進歩性は、これまで以上に評価すべきであろう。またこの十八世紀が近代日本の歴史の上で果す意味も再評価すべきであろう。——その他、諸点については専門の歴史家にゆずる。今はこうした事実をよく考えて、蘭語学史上の本書の位置を考えてみたいと思うのである。それを現代まで伝えてくれた忠恭やその他の人びとのことを考えてみたいのである。

さてこの忠恭の書写したものをひそかに転写したのが、本書であるから、厳密にいうと、本書は之の『和蘭緒言』を酒井忠恭が書写したという事実が判明するだけで、忠恭が書写したそのものは別に存在するわけである。それがもしも出現したらと願うことも切である。そしてこの転写の主、△等随俊衍△については、どういう人物か判明しない。△伏乞△とあるから、直接忠恭に頼んだのであろう。同じ藩、同じ志の人物であらうか。△等随△とは珍姓に属するであらうから、あるいはそのうちに判明できるかもしれない。諸兄姉の御教示を願っておく。

4

構成と内容
本書の内容構成を、わたくしなりに分類してみると、ほぼ次のようになる。

和蘭緒言

○序

一、和蘭の文字・1、文字の数 2、呼称 3、字体——ドル・ユク・レットルほか数種の字体を具体的に示す。

4、算数文字（数字） 5、奇字（テークンレットル）

二、切韻・セイラベンと呼ぶ音節のこと。1、五十音図を横文字で表記した切韻図 2、字音を学ぶための

切韻図。

右を青木昆陽の『和蘭文字略考』（延享三年（一七四六））と比較すると記述の方式で類似しており、あつかっている内容もほぼ同じである。ただ同書には単語もあげているが、本書は、文字と綴り、発音を示すのみで終っていて、ごく基本のみである。また、前野蘭化の『蘭訳筌』と比較すると、記述の方式は異なるが、説明の表現や内容はほぼ同じである。ただやはり蘭化のものには、単語や短文がある点で異なる。両書と本書とを比較したところでは、記述の方式が○印で簡条書き的な点などは、昆陽との直接的関連を認めることができる。まず冒頭のものから示してみよう。（一）内に参考までに『和蘭文字略考』（油印本による）から引用して示しておいた。

○和蘭ハ文字ニ義訓ナシ文字僅ニ二十五字ヲ以テ用ヲ成スタトヘハ吾邦伊呂波四十七字ニテ用ヲ成スカ如シ
（一和蘭はアベセデ……二十五字ヲ寄合セテ用ルナリ大抵我國ノ伊呂波ノ如シ此二十五字ヲ和蘭人アベセデト云云我國ニテハ阿蘭陀伊呂波ト云）

○和蘭二十五文字ノ總名ヲアベセト云フアベセハ二十五字ノ上ノ三字ノ名ナルユヘ此三字ヲ以テアベセト號ス
此際ニテ假名四十字ヲ伊呂波ト云フガ如シ。*右の注記双行を参照せよ

○書籍ノコヲブークト云フワラントデナラヒ和蘭小學ノコヲ書タル書籍ヲアベブークト云フ（和蘭ニテ書物をブウクと云）

○レットレンニ四體アリ曰クドル押ユクレットル曰クホウフトレットル曰クメルク、レットル曰クテレッキ、レットル此四體ヲ用ユ此ノ外ニ別體ニ様アリ曰クセイヘル、レットル曰クターケン、レットル此二様トモニ

六體ナリ此外ニローフン、レツテルト云フテ走筆ノ體アレハ別ニ一體トハ成シカタシ蓋シローフレハテレツ走
キト同一體ナリ（和蘭文字三體アリ篆ノ如キをドルクレットルと云トルクレットルは板行文字と云コトナリ眞ノ如キヲメルクレットルと云メルクレットルはしるしに用る文字と云コトナリ草ノ如キをテレツキレットルと云テレツキは引なりレットルは文字なり草字ノ如ク引ニよりテレツキレットルト云（後略）／一和蘭文字三體一體
ゴトニ數體アリ此書敦書觀タル體ヲ記ズ／一ローフンは早書ノコトニテ甚ダ讀ガタキユヘ記ズ一和蘭ニアベセデ二十五字
の外ニ員數の字アリ）

○讀誦ノヲラレーセント云フ／○切韻ノヲラセイラベント云フ（後略）字學ノヲラシケレーヘント云フ寫字ノ
總稱ナリ今コ、ニ文字ヲ書クヲハシケレーフト云（和蘭ニテ書ことをシケレイヘンと云讀ことをレーセン
と云寄せのこととをセイアベンと云ナリ）

以上で両者の相関は推量できるかと思う。文字の字体についていえば、本書は同じハドルク（ドリユクとも表記）レッテ
ルVにも、具体例としては五体をあげ、ハホーフト、レッテルVは一体、ハメルク、レッテルVは二体、ハテレツキ
レッテルVは二体をあげるなど合計三体のみの『和蘭文字略考』よりはるかに豊かである。ハテーケンレッテルVは
ハ3白羊Vなどハ十二宮ノ記号Vであるが、これは『和蘭文字略考』（以下『文字略』と略称）にない。こうした点では、蘭
化の『和蘭訳文略』にきわめて近いといえる。ハ◆ハビュンクトト云フ段落ナリ／是ハビュンクトニ用ユコレハピン
ネノ中ノ墨ヲ尽シガ為ニ書ス ピンネハヲラドノ翮筆也Vなど、いずれも蘭化のものと共通した記述である。また
ハセイラベンVをハ切韻Vと訳している点は、『文字略』でハセイアベン／寄せのことVと訳しているのと異なる。⁽⁸⁾ 説明用語からは、蘭化の諸作品と共通していて、まさしく蘭化の指導を得たことがわかる。ハAア・Eンユ・Iイ・
Oヲ・UンユVの順で五十音図に準じて示しているハ切韻図Vの図表も蘭化の『和蘭訳文略』や『和蘭訳箋』に類似
する。ただ、蘭化はハA・E・I・O・œ・U・yなどと配列されている点がやや異なる。この点は『文字略』の

Λ a e i o u v の方に近い。¹⁰⁰ 蘭化はそれらをやや進展させていると受けとれるのである。紙数の関係もあるので、最後に Λ セイ ヲ ヲ ヲ とある切韻の図譜（写真Ⅲを参照）について検討しておこう。図譜の説明が次のようにある。

○夫レヲ^{和蘭}ランド之セイラベンヲ學フニハ先ツ彼國ノ音字ト名字トヲ能ク熟得シテ而後ニセイラベンヲ學ヒ得ベシ此レヲ學ブノ法吾 邦ノ五十音ノ假名^{ナカヘシ}反切ニ略々同シ（後略）

○彼國字音ノ書ニアブブクト云フ小冊子アリアベセ二十五字ノ諸體ヲ載ス其中ニセイラベントテ吾 邦五十
字文ノ如ク字譜ヲ載ス彼國ノ童蒙ハ此セイラベンヲ以テ字學ノ初メトス故ニ今コレヲ玆ニ載ス蓋シ切韻之譜
也

乃ヲランドニテ字音ヲ學ブノ法左ニ記スルセイラベンノ譜ヲ暗誦セシムルコト也予年々 朝貢ノ和蘭人ニ之
ヲ學ヒ粗々其端峴ヲ記得シ且ツ之ヲ同學樂山前野氏ニ正セリ

右の説明で、図譜は原書から借用したこと、蘭人から音を習ったこと、樂山に質正したことなど之徴の学習の根拠がわかる。¹⁰¹ さらに Λ 字母 v との組合せを、Λ Ab eb ib ob ub v などと示す。これは、『文字略』の Λ ab eb ib ob ub v と一致している。現存の蘭化のものにはこれが見えないが、おそらく『和蘭訳文略』が完本として出現すればこれが見られると思う。大槻玄沢の『蘭学階梯』にはば同一の図譜が採用されているから、之徴が独自に作成したわけではなく、本書の記述、その用語、構成を検討すると、昆陽と蘭化のものを結ぶ中間的作品であると断定してよさそうである。いわば昆陽—之徴—蘭化という初期江戸の蘭語学の流れをたどることができる。あるいは昆陽蘭化の流れを補うに十分な資料的価値を認めることができる。さらには、蘭化玄沢への流れを補う点もあって、これまでやや資料不足に悩まされてきた初期の江戸の蘭語学習の実態が、かなり明確になってきたと思われる。

なお本書の内容についてはさらに十分な検討、吟味が必要なのである。ここでは昆陽のものとの比較を主とし、蘭

化のものとの比較はすこしふれたにすぎない。筆者の関係論文を参照されたい。

註

(1) 小論「蘭化をめぐる二つの新資料」(武蔵野女子大紀要八号)を参照。

(2) 『明治前記 日本数学史』、『日本の和算』(平山謙)などを参照。

(3) 『蘭学緒言』の序では、八前野氏楽山先生Vと呼称している。これは八安永乙未四年Vに成立したことを示している。

(4) 『蘭訳筈』では、八弱齡ノ時Vから蘭語に関心をもち学習していると記述している。小論の八蘭化前野良沢の蘭語学Vに詳述した(未発表)。

(5) 八麗派Vの意味は原義とやや異なつて用いられているようで、ここは派出シタぐらいの意で用いたと思う。

(6) 前野蘭化の長崎遊学についても従来と異なる私見がある。

(7) 杉本つとむ『蘭学事始』(社会思想社)の註記を参照。

(8) 八セイヘルレットVについて、八正体・略体・時計之体・数之記Vと分けて示し、一から十億までを蘭語とともにあげている。さすがは数学者で、昆陽・蘭化にまさっている。

(9) ただし八字ヲ寄セテ音ヲ生スルコト也Vと説明(欄外)がみえる。

(10) 八キリンクレッテル(韻字)／メデキリンクレッテル(連韻字)、ストツメ(同上)Vという用語。また音節の結合をハクサリVと表記している点は、昆陽・蘭化のものと一致しているので、両者の類似は細部でもかなり一致しているといえそうである。

(11) ア行音を八能生音Vそれ以外を八所生音Vとも呼ぶ。蘭化と同じ。

江戸初期 蘭学者の生存期間比較一覧表

